

1994年6月15日発行 1975年2月28日第3種郵便物認可
毎月1回15日発行
定価／150円
年間購読料／2,000円（送料共）

編集／緑の地球ネットワーク
Green Earth Network

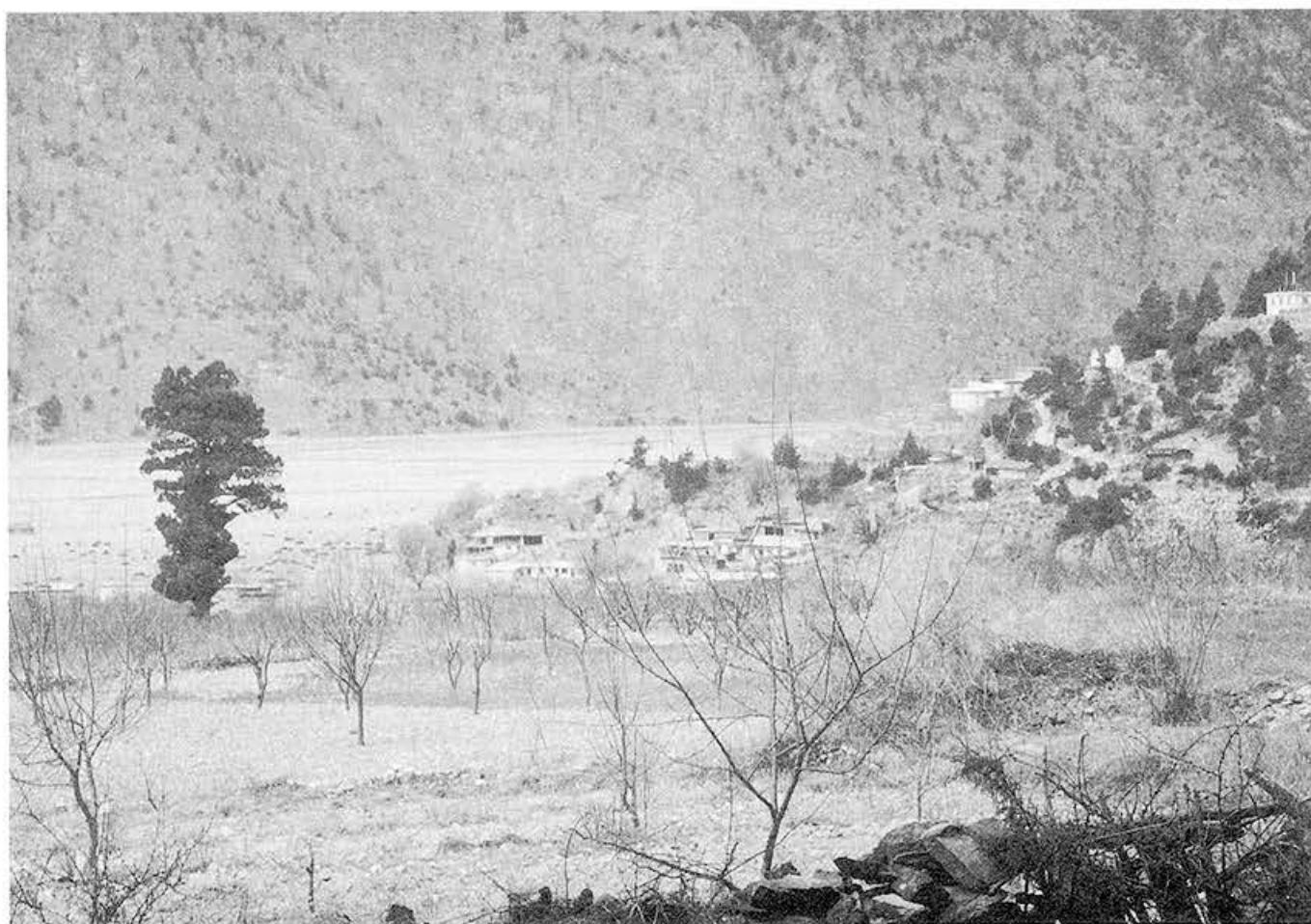
大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル（〒552）
Tel. 06-583-1719 Fax. 06-583-1739
郵便振替 00940-2-128465（大阪4-128465）
COM21通巻321号 発行/COM企画室

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- ネバール・サウル村での緑化協力の進展…P 2
- アイヌモシリでのナショナルトラスト…p 7



ネバール・サウル村をのぞむ。左側の大木はご神木のヒノキ。

1994・6

27

ネパール・ヒマラヤを緑に！

サウル村緑化協力 進行中！

GEN代表世話人 佐野茂樹

5月16日、サウル到着。今年1月、3月に次いで3度目、通算6度目です。今回の目的は、きわめて多彩かつ重要です。

第1に、完成した苗場に苗床をしつらえ、早速試験的に播種および育苗に着手すること、それに必要な農具一式を整えること。

第2に、住居兼事場が機能するよう、家具、食料など一式を整えること。

第3に、蛇籠工事を促進すること。

以上のことと、タシ・ワンドゥー、カルマ・シェルバなど在ネパールスタッフと日本人新スタッフ池迫健一を中心とする緊密なチームワークで遂行することです（日本出発前に、サウルの緑化協力にスタッフとして加わることに決まった高力憲子は今回ビザ期限切れ）。

また、この顔ぶれ全体が、村の人たちやツラチャン氏ら関係者と共に共通の目的にむかってともに前進する第1歩をふみ出すことです。

私が6月上旬には日本に戻らねばならない事情から、きわめてハードな行程でした。しかし、ネパール入り以後すべては順調に進行しています。

苗場の苗床づくりは、膨大な何万もの育苗用ビニール袋をとりのぞく作業が難行しています（これは、失敗に終わる某大プロジェクトの苗場跡地を私たちの新しい苗場としたからです）。

しかし、5月17、18日2日間で一部分を苗床とし、ハンノキ（榛・落葉樹）、ゴブラン・サラなど3種類を播種しました。他に、近くの森からトウヒ・ヒノキなどの稚苗（1年もの）をとりごくわずかながら試植しました。給水装置が未完なので、朝夕の水やりが大変です。こうした作業を5月いっぱいまで続けます。

住居兼事場は残念ながら未完成です。しかし、急ピッチで最後の仕上げにかかっています。

ギャビン（蛇籠）工事は遅れていますが、断固7月完工及び、その様々の手順が、今夜（18日）の村民総会（私たちも参加）で確認されました。

植林候補地ダンガルジョン村、パリヤク村訪問の予定は、スケジュールがきついため、タシ1人に行ってもらうことにしました。

毎日みんな仲良く、楽しくおおらかにやっています。現場の仕事はハードですが、文字通り不眠不休のカトマンドゥ、ボカラでの日々と比べると、しっかり食べ、ぐっすり眠れる分、しあわせです。ヒマラヤ緑化協力—昨年12月以来、私たちは確実に最初の大きなヤマ場を越えつつあるといってよいでしょう。

サウルまで応援に来てくれたリンチ・シェルバ、山のような荷物を運んでくれたディクバートル・バスネ、アウン・ツェリン、アナンダ・チェトリ一にはただただ感謝あるのみです。

（5月18日夜、サウル村宿場にて）



ダウラギリが美しい。水辺にいるのはヤクと牛の混血の使役獸。

たが、ネパール滞在中、サウル村を訪れたのは3月8日から17日と、5月13日から21日との2回です。本当にごくわずかの間だけサウル村に行ったのですが、第1回目は佐野さんのビザの関係、第2回目は私のビザの関係のため短期間の訪問となりました。

第1回目の訪問は私にとって初めてのサウル村訪問ということもあり、サウル村がどういう所なのか案内してもらうこと。そして今後、この緑化協力に参加するか否かを決めるための訪問でした。

というのも佐野さんとは昨年12月に初めてお会いし、その時にこの緑化協力に参加しないかと誘われたからです。今回の訪問はその返事を出すためのものでした。とはいって、実際は参加するつもりでネパールに行き、サウル村での緑化協力のために必要なことは何であるのか、具体的にどう計画実行すべきかを探ることを目的として訪れました。

第1回目の訪問は、佐野さん、私、カルマ・シェルバの3人で、苗場、カリガンダキ河に設置された蛇籠、またその支流に造られた蛇籠も見てまわりました。特にこの支流に造られた蛇籠の効果はすばらしく、蛇籠下の扇状地にはマツを主とするうつそうとした森林が形成されています。後継樹も確実に生長しており、この林地を計画的に利用、施業すれば、将来は立派な森林になるでしょう。

あらためて蛇籠の重要性を感じ、村が今一番必要性を感じているのが蛇籠だということに納得がいきます。



左から、リンチ、カルマ、佐野、池迫、タシ。サウル村の手前、レーテのゲストハウスにて。

あせらず1歩、 また1歩 池迫健一

ネパールでの3か月間はまたたく間に過ぎ去ってしまい、今こうして日本で原稿を書いています。

3か月間はほとんど個人旅行みたいなものでし



しかしこの支流の上流にある湖の水が3、4年ごとにあふれだし決壊するために、現在さらに上流に蛇籠を設置する予定です。

第2回目は、佐野さん、タシさん、リンチ・シェルパ、カルマ・シェルパ、私と、GENの生活用具を運んでくれたボーター3人、計8名で訪問しました。

今回の目的は、GENのスタッフ滞在用にカトマンドゥやボカラで購入した生活用具をサウル村に運ぶこと、苗場に畝を作り実験的に種を植えることでした。

5月には完成していたはずのGENの家は屋根はおろか壁も半分ほど、床、ドアなど全く完成していない状態で、ここが日本でなくネパールだということに気づかされた思いです。良きにしろ悪しきにしろこれがネパールタイムというもので、ただ気長に待つしかないといったところ。

サウル村到着翌日から苗場に埋もれた何千という育苗用ビニールポットの掃除と、佐野さんが持参した種を試験

的に植えるための畝作りを開始。畝は2日後には完成し、幅約50cm、長さ約15mの3畝に、ハンノキ、ゴブラ・サラを植え、とりあえず終了しました。

やはり3か月間の観光ビザでは、サウル村での仕事も体験したといった言葉のほうが的確かもしれません。本来なら、長期に滞在して毎日植物を観察したり、村びととコミュニケーションをはかり、村民が積極的に提案をするような関係を作るのが望ましいのですが、現状ではどうしようもありません。今、日本人スタッフが1年をとおして滞在する案を佐野さんと検討中です。

ただこのGENの協力は、金や機械などのものを援助するだけのものにしてはならないと考えています。ネパール滞在中、あちこちでブルドーザーなどの大型機械が野ざらしにされているのを見て、ネパールへの援助の実態をかいみた思いでした。

一方的な援助ではなく、村と共同して考え、共に学び、実行してい

かなければ良い結果は出ないでしょう。

とにかく、サウル村での事業はゆっくりではあるが、着実に1歩1歩前進しています。これから先、あせらずに良い意味でのネパールタイムで行動していくこうと考えています。

Mitakye Oyasin (アメリカ原住民の祈りのことば。All my relations.)



農地を流す洪水を防ぐため、蛇籠の建設が急がれる。

ヤオトンに泊まる♪

夏の黄土高原ワーキングツアーのお誘い

黄土高原夏のワーキングツアーの日程が決まりました。前号のお知らせから日程・費用ともに変更がありますのでご注意ください。

大同周辺に広がるGENの緑化協力地を訪ね、小学校付属果樹園や苗畠で作業します。西留郷のヤオトン(窓洞)も完成しますので、ここに泊まって農村の早朝から夕暮れ、夜まで1日まるごと体験し、村の人びとの交流を深めましょう。

今回は成田発着の飛行機で往復となります。

▼スケジュール

7月25日 成田空港出発

26日～8月1日

大同市の黄土高原で緑化活動。

1. 漢源県恒山森林公園・見本園の植林活動に参加。恒山、懸空寺見学

2. 漢源県西留郷の中日友好交流青年友誼林で作業

3. 大同県徐町郷の地球環境林で作業

4. 小学校付属果樹園で作業
5. 各地で農村家庭の訪問、青年を中心に農民と交流

8月2日 雲崗の石窟、万里の長城
(宏賜堡) 見学 (専門家班と合同)
8月3日 北京市内の観光と買い物
8月4日 北京空港から帰国、夜、成田空港到着

▼定員と締切り

15名。最終締切りは6月25日ですが定員にたっしだいに締め切れますので、申込みはお早めに。

▼費用

19万円 (交通費・宿泊費・食費・ビザ手数料・GEN会費1年分が含まれます。成田までの交通費は含まれません)。会員と学生は少し安くなりますのでお問い合わせください。

▼受入れ団体

大同市青年連合会。

▼申込み

GENの事務所に申込み用紙を準備

しています。申込金3万円をそえて申し込んでください。

専門家の団について

今までのところ順調に進んでいる黄土高原の緑化協力ですが、植林困難地での活着率の向上や樹種の多様化など課題は山積みです。植物生態・林業などの専門家の方たちに現地の植生や土壤などを見ていただき、今後へのアドバイス・ご協力をいただけたらと専門家の調査団を企画しました。

立花吉茂さん (花園大学教授・大阪市立咲くやこの花館技術顧問)、遠田宏さん (東北大学付属植物園園長) が参加を予定されています。

▼スケジュール

8月1日 成田空港出発

2日 雲崗の石窟、万里の長城
(宏賜堡) 見学

3日～8日

大同市の黄土高原で緑化考察

9日・10日 北京滞在

11日 北京空港出発、成田空港到着

くわしいことは、GENの事務所までお問い合わせください。

アイヌモシリでのナショナルトラスト

“北海道”という地名は、1869年に、明治政府が先住のアイヌ民族に相談もことわりもなく、広い大地を勝手に取り上げてつけた名前です。アイヌ民族の言葉アイヌ語でそれはアイヌモシリ（人間の静かな大地という意味）と呼ばれています。

私たちはこのアイヌモシリの森林を再生するための活動をはじめようとしています。しかしこれはたんなる“自然保护”ではなく、私たちとアイヌ民族との関係の歴史と本来あるべき姿、めざしていく将来像を基礎にしなければなりません。私たちは、準備をすすめるなかで、世界の先住民族やアイヌ民族のことにつかわって活動してきたいくつかの団体と知り合い、アドバイスをいただきました。今後とも、共に協力関係をもっていきたいと考えています。今回はそのうち、原稿を送っていただいたものを紹介します。

（武田繁典）

●サバイバル・インターナショナル

サバイバル・インターナショナルは、先住民族の権利をまもるためにキャンペーンをおこなっている国際的団体です。1969年に設立されロンドンに本部を置き、欧米を中心世界の60カ国以上に会員をもっています。S Iは、全世界の危機に直面している先住民族のために、精力的に手紙や署名などのキャンペーンをおこなって国際的に注意を喚起するとともに、先住民族が自分たちの将来を自分たちで決めができるように運動を続けてきました。このような活動が認められ、1989年には民間のノーベル賞といわれる『ライト・ライブリーフット賞』を受賞しました。日本でのS Iの活動は5年ほどで、まだ支部もなく会員も多くはありませんが、黙殺されてきたアジアの先住民族のためのキャンペーンを中心に頑張っています。アイヌ民族の問題は世界の先住民族の問題であり、さらには全ての人間の基本的権利にかかわる

問題であると考え、先住民族の問題としてアイヌ民族の問題を取り上げていこうと考えています。

▼連絡先 〒702 岡山市松浜町16-20
真実一美 Tel/Fax.086-265-1495

●二風谷ダム裁判とつなぐ会

サッポロ（北海道札幌市）から南へ約80km、ニブタニ（平取町二風谷）を流れるシリムカ（沙流川）に、北海道開発局は二風谷ダムを建設しています。1989年、北海道収用委員会はダム建設のため、アイヌ民族の萱野茂さんと故貝澤正さんの土地を強制収用する採決を出しました。これに対し、93年5月、萱野さんと貝澤耕一さん（正さんの長男）は札幌地裁に収用の採決取り消しを求める行政訴訟を起こし、現在、口頭弁論が続いています。そこで、地元札幌などに住む私たちは「二風谷ダム裁判とつなぐ会」というグループをつくって、全国の人に裁判の状況を知らせるために、93年12月からニュースレターを発行しています。

そこで、みなさんへのお願いです。
1. 札幌およびその近郊のかたで、いっしょに裁判を傍聴したり、ニュースをつくり、発送したりの仕事を担ってくださってもよいというかたは、ご連絡ください。とくにひごろ、アイヌ民族の問題に関心を持ち、かかわりをもちたいと思いながらきっかけがつかめなかつたかたがおられたら、ぜひ参加してください。

2. ニュースの購読者になってください。裁判は、年間4～5回のペースではないかと考えています。通信費、印刷費などで、実費2000円（年間）をお送りください。みなさんのご賛同、ご協力をお願いします。

▼連絡先 札幌市白石区南郷通7丁目北4-5 広和マンション602号中村様方
「二風谷ダム裁判とつなぐ会」

Tel/Fax.011-846-4727

発起人（50音順）建部裕美子、中村康利、花崎皋平、宮島利光、山田真一

アイヌモシリでのナショナルトラストをすすめるために

わが父、貝澤正を語る

新井幹子

『緑の地球』24号（1994・3）で紹介していますが、新井幹子さんは、故貝澤正氏の長女で、いま関東に在住です。お父さんの思い出と、正氏の遺志であるアイヌモシリの森林を取り戻すことやナショナルトラストのことが語られるでしょう。

- 6月25日（土）午後6時～8時30分
- アピオ大阪 204号室

JR森ノ宮、地下鉄中央線森ノ宮駅西へ徒歩3分（Tel.06-941-6332）

●資料代 800円

現地宿泊研修会の案内

二風谷ワーキングツアー

●日程

8月18日（木）～23日（火）

18日：午後2時 JR富良野駅前集合
ラベンダー園、麓郷の森をへて、
東大演習林セミナーhaus泊

19日：東大演習林見学

二風谷へ移動、平取温泉泊

20日：チブサンケ（舟おろし祭）参加、博物館等の見学 同上泊

21～22日

交流、周辺の森の見学、山仕事、畑仕事、木彫り・刺繍体験など
二風谷莊泊

23日：午前11時二風谷にて解散
(活動内容は天候などにより一部変更するかもしれません)

●費用

集合から解散まで1人5万円

（大阪・現地間の費用は別。往復で飛行機なら約7万円、フェリーなら約2万円）

●定員、締切り

約10人、7月30日（ただし定員にたっしだい締め切りります）

●申込み・お問い合わせは下記まで
GEN事務所（Tel.06-583-1719）

山西省の自然

石原忠一
(92年緑化協力団団長)



(20) 驢馬(ロバ) *Equus asinus L. 1758*

しっかりした蹄の四肢をもった肩高1mあまりの、可愛い眼をした、耳の長いロバは、山西省のどこでも見かけるおなじみの家畜です。

恐竜たちが姿を消したあと、広大な乾いた原野で、草を食べ遠くの水を求める天敵からのがれるために、発達した1本指の爪先きで駆ける哺乳動物として、はじめは小犬ぐらいのものから、次々と進化をとげた化石が主として北アメリカで、うまくみつかっています。

人類が活動しはじめるころには、今日ウマ属(*Equus*)と呼ばれる、ウマとシマウマとロバが生き残っていました。シマウマは一度も家畜化されませんでしたが、ながらく狩りの対象であったウマが飼われるようになったのは、せいぜい4~5,000年前とされ、そのウマより一足さきに戦車を曳くのにロバが

使われたという説があります。

馬が権力者の象徴として飾りたてられ、武将の功名と共に駿馬の伝説が語りつがれたり、騎馬集団の戦闘力が歴史を大きく動かしたかげに、らくだについて乾燥に強く、数日間も水なしで耐え、粗食に甘んじる辛抱強いロバは、常に民衆の側にいて、人々と荷を運んだりしていました。20世紀の奇跡といわれる毛沢東らの指揮する紅軍の長征もロバの力なくしては成功しなかったでしょう。

ときには、気にいらないことがあると四肢をふんばってテコでも動かない強情さがあり、ドンキホーテの従士サンチョ・パンサの乗りものとなったり、ユーモラスにあつかわれてきましたが、乾燥した農村には無くてはならない伴侶です。

山西省では1頭400元(1元=約13円)ぐらいで取引きされることが多いです。でも農村での平均年収が300元前後なのです。



牛とかよく働くロバ。運搬にも使われる。

大同市からのたより

未来への緑化協力に向けて

緑の地球ネットワークとの緑化協力を円滑にすすめるため、現地で会議が開催され、そのようすを伝える手紙が届きました。今春の植えつけは順調に終わり、苗木はどこでもしっかりと根づきつつあるようです。

共青団大同市委員会と大同市青年連合会は、5月20日、広靈県で地球環境林建設現地会議を開き、市委員会副書記・祁学峰、青年連合会副秘書長・赫俊明、青年農民部長・常健民と、7つの県、2つの区の共青団書記、緑化協力プロジェクトが所在する郷・鎮の党書記など40数人が出席しました。

会議の主な内容は、大同市と緑の地球ネットワークの緑化協力のこの3年間の進行を振りかえり、総括することをつうじて、認識と考え方を共通にし、管理を統一していくことです。会議は『中日環境林植栽・保護管理規則(試行)』と『緑の地球ネットワーク協力資金管理使用規則(暫定)』を決め、

3~4月の緑の地球ネットワーク緑化協力団の受入れに関する報告などを祁学峰副書記がおこないました。

その後、出席者は広靈県邵庄郷邵庄村小学校の果樹園を実地に見学しました。祁学峰、赫俊明、常健民の3人は、さらに広靈県の平城郷と邵庄郷で果樹園の生育状況をみました。生育状況は基本的に良好ですが、一部に虫害が発生しているところがあり、ただちに措置をしました。

その翌日、3人は渾源県のいくつかの協力ポイントを訪れました。苗木の成長は正常で、活着率はどこも90%以上です。また奈良からの女性団体を迎える準備をおこなうため、3人は長條村を訪れ、村長と受入の任務分担をおこない、その準備を整えました。

この会議と現地調査の写真と資料を同封します。

大同市青年連合会主席 鄭向華

カンパ・入会のお願い

~広げよう

緑のネットワーク

黄土高原の緑化協力は昨年度で飛躍的に伸びました。これは各種助成金の給付に大きく負っています。多くの苗木をおくることができます。嬉しい反面、「助成金と同じくらいの金額を自力で集められない」という清田さん(93年5月緑化協力団団長)の言葉が重く感じられます。「同じくらい」とまではいかなくても、助成金が出なくなったら緑化協力は打ち切り、ということは無いように、GEN自身の財政基盤を確立しておきたい。というわけで、不景気ですがボーナスシーズンをひかえ、毎度のカンパのお願いです。

また、GENの会員の更新率はかなりのものだと自負しておりますが、最近嬉しいことに新会員が少しづつ増えてきています。身近に環境問題に関心をおもちの方がおられたら、GENのことを教えてあげてください。お名前・ご住所等事務所にお知らせください。資料はお送りします。

高性能浄化槽の普及を！

河川・海を汚染からまもるために…

松坂豊彦 産業機器開発（株）

少し古いデータですが、1986年の厚生省調査によると日本の総人口1億2千万人のうち、水洗便所を使用している人口は、約6,800万人（総人口の約56%）で、その半分である約3,300万人が浄化槽を使用する人口になっており、浄化槽は下水道と並んで、“水洗化”に大きく貢献しています。

ところが、浄化槽には“単独処理”と“合併処理”的2種類があるということは、意外に知られていません。“単独処理”はし尿のみの処理をおこない、台所、風呂排水などのいわゆる生活雑排水はタレ流しです。これに対して、“合併処理”は、し尿と生活雑排水の両方を処理するものです。

現在、建築基準法では、浄化槽の設置について、単独、合併の区別を義務としていませんので、設置者（施主）はどちらを取り付けてもかまわないわけです。ところが、河川や湖沼などの身近な環境に与える影響は図1に見られるように、大きな差があります。人はBOD負荷量（汚れの指標で、数値が大きいほど汚れがひどい）になると1人1日40gの汚れを出していると

されます（表1）。単独浄化槽のみの場合、処理水5gと生活雑排水27gの合計32gが環境中に放出されることになるのに対し、“合併”の場合は、その約3分の1の12gの放出に押さえられることになります（図1）。

また、設置基数の比較は全国で単独が約600万基に対し、合併が約10万基で、圧倒的に単独が多く、実に浄化槽の99%が単独という実態なのです。

現在、生活雑排水対策の必要性がさけばれ、厚生省も家庭用小型合併浄化槽に補助金をつけ、その普及促進が計られるようになってきています。浄化槽の排水基準もBOD濃度で単独の場

合90mg/lを、合併で20mg/lにするよう「改善」されてきています。しかし、この20mg/lの排水基準でも決して充分とはいえない。淀川河口付近のBOD濃度はおよそ3mg/lといわれるのと、20mg/lの排水を河川に放流すると、確実に汚染源になることになります。

今、各浄化槽メーカーは、20mg/lを基準に家庭用小型合併浄化槽を制作していますが、私たちはより高性能なつまり、放流しても河川をキレイにする浄化槽の制作を、石井式で追求しています。石井式ではおおむね5mg/l以下を常時クリア可能だからです。

今、求められるべきは、安価で、性能がそこそこ（90mg/l、20mg/l）の浄化槽ではなくて、ほんとうに環境改善に役に立つ高性能浄化槽なのです。

排 出 源	汚水量 (l/人・日)	B O D	
		負荷量 (g/人・日)	濃度 (mg/l)
便水 便所	50	13	260
便水 台所	30	18	600
便水 雜洗濯	40		
便水 風呂	50	9	75
便水 洗面	20		
便水 排除雑用	10		
計	200	40	200

表1

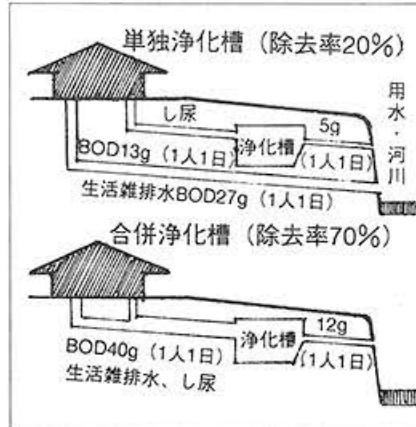


図1

にわか植物学者の1日 自然と親しむ会開かれる

「植物を覚えるなら、目だけではだめ。手でさわって、匂いをかいでの歯でかんで、感覚を総動員しないと」



小雨がぱらつくなか、参加者たちは園内を散策。

大阪市大理学部付属植物園の木々を世界中から集めてこられた立花先生は、こうおっしゃいました。でも、葉っぱなんかんだら苦そう。「これは苦い、これは青臭い、それで覚えますのや」苦いのはいやだ。ついでに毛虫もきらい。植物学者への道は険しい。

5月15日、私の同植物園で開かれた「自然と親しむ会」は、雨天にもかかわらず40人近くの参加者が集まりました。小雨が降ったりやんだりのなか、植物園内の『日本列島7分間のコース』（実際はもっとかかりました）を、立花先生の案内で散策。クスノキの葉をち

ぎって匂いをかいだり、日本タンボボと西洋タンボボの違いについて聞いたりしながら（ちなみに同植物園にあるのは全部日本タンボボ）、園内を巡りました。昼食時には、春の黄土高原ワーキングツアーのビデオを上映、みなさん熱心に見てくださいました。

午後からは日本や世界のいろいろな植物のスライドをみせていただき、珍しい植物の話や、プラントハンティングのエピソードなどを伺いました。

空き地を放っておいたら草木が茂り、アスファルトを割って草や木の根が伸びる。私たちはそれが当たり前だと思っていますが、日本ほど気候風土に恵まれ、生命の豊かな環境は世界でもまれなのだそうです。そうした自然を少し身近に感じた1日でした。



伝えられたら…

山下純子

「環境問題に興味ある？」知人に聞いたら、冷たい声が返ってきました。「ああいう世界の人たちって、宗教じみてますからね」

屋外の宴席で使われる、たくさんの紙皿や紙コップ。幹事さんの手間を考えれば、「使い捨ての容器はやめよう」なんて言いだせない。

こちらの考えが間違っているとは思わないけれど、誤解されないように伝えるのがむずかしくて、あきらめてしまっています。

矛盾なく、どこかのだれかを踏みつけることなく生きてゆけたらと思いません。その上でもちろん、自分も、だれにも踏みつけにされず。どうしてもそ

れができないならば、せめてほんの少しでも、不当に取られている人たちに返したいと思う。当たり前のようなことなのに、今の世界は、そうじゃない。

知らされて、一度罪悪感を持ってから忘れられない。私は、実際に行動を起こしている人は、正義感がとても強い人ではないかと思っています。

ル・グインの短編集に、1人の子どもの犠牲のうえに成り立った美しい都市から、何も語らないで荒野へ旅立つてゆく人びとの話があります。

議論さえできない自分に、そういう勇気や覚悟があるのかわからない。だけど、ゆっくりと周りに働きかけていくこともできるはずですよね。

仕事のことや家族のこと、明日発売のCD、次の週末の予定でそれぞれに忙しい人たちに、重くとられないよう、誤解されないように、自分にとっての「快適さ」を伝えていきたいのです。自然をまもってゆくことが、遠くで、みんなが権利を侵されず生きてゆく世界を作ることとながっていると、いつか話せたらと願って。

やまももをどうぞ

みかんの有機栽培でおなじみの高知の田中さんから“やまもも”的出荷がはじまるお知らせがときました。野生味あふれる“やまもも”はそのまま食べてもよし、果実酒にしてもおいしいそうです。ちなみにやまももは雌雄異株で、最近よく街路樹につかわれているのはほとんどが雄株。残念ながら実はなりません。

●やまもも（低農薬有機栽培）

1kg 3,000円（送料別・関西 620円）

出荷は6月20日～7月5日。ご注文の際は、ひとこと「GENの紹介」とそえてお申込みください。

〒781-74 高知県安芸郡東洋町甲浦

田中隆一さん

Tel/Fax. 08872-9-2500



使用済磁気カードの回収に ご協力を

前号でお願いしました使用済みテレカ、早速何人かの方から送っていただきました。ありがとうございました。また、連合大阪の環境フォーラムで少しお話しさせていただいたところ、ご協力を申し出させていただきました。

使用済み磁気カードの回収は継続しておこないますので、今後ともよろしくお願ひいたします。

スライドができました

GENの資料といえば、文字が主体でこむずかしいものばかり、と思っていませんか。このたび、パネルに加えて、スライドが完成しました。今までの写真のなかから100枚近くを選んで、黄土高原の緑化についてまとめてあります。ご希望の方には貸し出し（解説者出張もOK）いたします。パネルとあわせて、ご利用ください。

「黄土高原に緑を！」の絵ハガキも、

ささやかな協力を

前田浩子

いつも会報を読ませて頂いて励まされています。本当に、この1年間の活動の展開はすごいですね。心から敬意を表したいと思います。僅かな資金協力にとどまっている自分が恥ずかしいです。せめてできることと思い友人達に声をかけていますが、今回もささやかな協力を得ることができました。4人の友人から4万円のカンパです。黄土高原緑化基金として使ってほしいとのことですのでお送りします。（後略）

GEN自然と親しむ会

植物の繁殖と

土づくり

「家の植木に水もやらん人が、中国に木を植えにいってどうするの」と家族に言われた、92年夏のワーキングツアー参加者のKさん。私も同じ、と思いあたる人も少なくないのでは。そこで、本格的な夏を前に、園芸植物の手入れを勉強しませんか。講師は、前回にひきつづいて立花吉茂先生です。

- 日時：7月3日（日）
- 場所：咲くやこの花館
- 集合：午前9時40分、地下鉄「鶴見緑地」改札口前
- 参加費：大人700円 小人（中学生以下）200円。保険料含む。咲くやこの花館入館料（高校生～64歳500円、あとは無料）は別。
- 内容：10時～12時 本館見学
12時～13時 昼食
(お弁当、食堂利用もOK)
13時～15時 実習（種まき、挿し気、土作りなど）
- 解散予定：15時
- お申込みは、6月28日までに GEN事務所へ。

新しいものをと考えていますが、前回作成したものがまだ少々残っていますので、ご希望の方はお申し出ください。

私たちどこへ行くのか…

SS集会で考えたこと

去る3月、神戸で3日間にわたり開催された、サステイナブル・ソサエティ全国集会（SS集会）についてほんの一部ですが紹介します。

まず、サステイナブルって何、といいますと、持続的なとか永続可能なという意味です。今の人類の営みは、このままでは近い将来破局を迎える、という認識がブラジル地球サミット以来広がりました。悲観的なみかたであと30年、楽観的にみても100年で破局といわれています。そこから、持続可能な社会への模索が始まったわけです。今回の集会は経済や法制度など8つの分科会にわかれ、国内外の専門家と一般市民、学生が入り交じて論議しました。なかでも、海外ゲストのバフグナ氏（インド）と、オリンドウ氏（アフリカ）の発言は聴衆に強いインパクトをあたえました。

ペレズ・M・オリンドウ氏【ケニア前国立公園庁長官】

●自分たちの生命母体を破壊しようとしている。そのつながりを忘れてしまった。

●みんなにしてほしいことーお金はかかりません。必要なだけ食べる。物を捨てない。買わない。しばらく続けて、財布の中身はどうか。それを友達に伝える。これであなたもSS革命に参加することになる。

洋服が欲しい、バッグも靴も、手元

にはバーゲンセールのDMが……そして簡単に買えるカードが財布に。衝動買いしそうになる度、オリンドウさんの話を思い出しておもいとどまることが多くなりました。

サンダルラル・バフグナ氏【インド・チブコ運動指導者】（白いひげに白い簡素な服で、まさに聖人のような方でした。）

●先進国の大量消費は異常だ。消費の伝染病にかかっていないのは地球上あとわずか、先住民族、イスイットだけ。

●（パネル討論で）エコロジーとエコノミーを別だと考えている人が多い。エコロジーは永続的なエコノミーである。我々の銀行は破産しかかっている。水や空気、いのちの資本、食料生産のための多様な森林が危機にさらされている。

●日本には新しい技術をもってきてほしい。コンピューターや機械ではなく、心を変える技術を。

最後に、1992年モントリオール国際環境会議で、バフグナ氏が述べられたメッセージを紹介したいと思います。

◆私たちはチブコと呼ばれている。チブコというのは「抱きつく」という意味。私たちは木が切られる時、木が切られないように木に抱きつく。そして木と共に切られて200人の仲間が死んだ。

今、私たちの森にあなたの方の國から

たくさん的人がきて、たくさんの木を切り、たくさんのダムを作ろうとしている。ダムができると森が沈み、私たちは生きていけない。

このようなことが二度と行われないために、私たち10万人のチブコは水に沈む覚悟をした。はっきり言う。よく聞いてほしい。

私たちは決して貧しくない、私たちは豊かだ。何もほしくない、ダムも電気もお金も。

あなた方は変わった。あなた方は経済という宗教にとりつかれてしまった。あなた方の神様はお金、儀式は開発、いけにえは地球。神様からの贈り物は飢えと公害と戦争。

私たちは開発を求めていない。開発は自然を殺すこと。一時の富をもたらすが永遠の生活と幸せを失う。

私たちは幸せを求めている。それに小さな土地と小さな水、そして小さな食べ物で十分なのだ。幸せはお城からくるのではなく、自然の中にすでににある。

悩みは欲の中にあり、幸せとは欲を放すこと。あなた方はどうしてそのあたり前のことを忘れてしまったのか。あなた方はどこに行くのか。

（資料提供：地球村事務局

Tel. 06-281-0309）

ヒマラヤの麓で、一人の主婦の提案から生まれた、チブコ運動。国際的な批判の中、世界銀行は融資を中止し、森林伐採の中止を勝ち取りました。木を伐る人、木を植える人、そして木と共に切られた人……さまざまな人がいる。

（徳山良枝）